

日本旧石器学会

ニュースレター 第7号

NEWS LETTER No.7  
JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

## 特別寄稿 山陰・中国山地における最近の旧石器時代研究

—原田遺跡の発掘調査を中心として—

伊藤徳広（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

これまで山陰地方では旧石器時代の層位的な調査はごくわずかで、知られている資料のほとんどは表採品や縄文時代以降の包含層から単独出土したもので、遺物整理中に旧石器と確認、報告されるものなどもあり、研究には資料的な制約が非常に大きかった。しかし、近年になって、山陰や中国山地で旧石器時代の発掘調査事例が増加している。ここでは、島根県原田遺跡の調査状況を中心に近年の山陰及び中国山地の事例を紹介したい。

原田遺跡は島根県仁多郡奥出雲町佐白にある。中国山地から流れ出る一級河川の斐伊川は奥出雲町三成から雲南市にかけて幾重にも蛇行するが、遺跡はこの蛇行部分の内側の河岸段丘に形成されている。国土交通省の尾原ダム建設計画による分布調査の一環で発見され、当初は縄文時代などの集落跡と考えられていたが、縄文時代調査の後、下層の文化層確認のためトレンチ調査を実施したところ、1・2層（黒ボク層）の下から石器が出土することが判明したため、旧石器時代を対象とした調査方法と体制に移行した。トレンチ調査の結果、遺物の密度がかなり偏っていること、礫群が相当数検出される可能性があり、旧石器時代の遺構・遺物が広範な区域に広がっていることが確認された。



写真1 空から見た原田遺跡

原田遺跡の基本層序は以下の通りである。1・2層：黒色土層（縄文時代前期～中世）、3層：黒褐色土層（漸移層）石器包含層、4層：浮布降下火山灰・浮布降下軽石層（約16,000年前【未較正年代】）石器包含層、5層：明褐色土層 石器包含層、6層：AT火山灰、7層：明褐色土層 石器包含層、8層：池田降下火山灰・池田降下軽石層（約3～4万年前【未較正年代】）、9層：明褐色土層 無遺物層、10層：礫層（閃緑岩と花崗岩）。

旧石器時代の遺物包含層は3層から4層上半と5層、7層の3つである。4層は上半が火山灰層と考えていたが、火山灰を含む二次堆積層と思われる。また、8層の火山灰層も二次堆積の可能性があり、

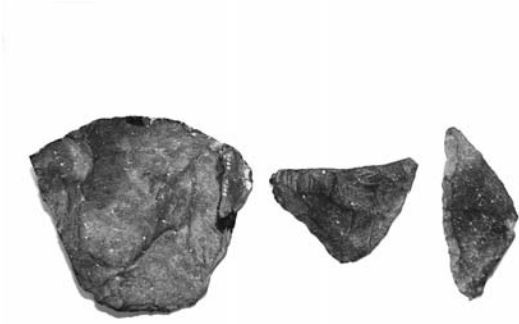


写真2 スクレイパー (3・4層)

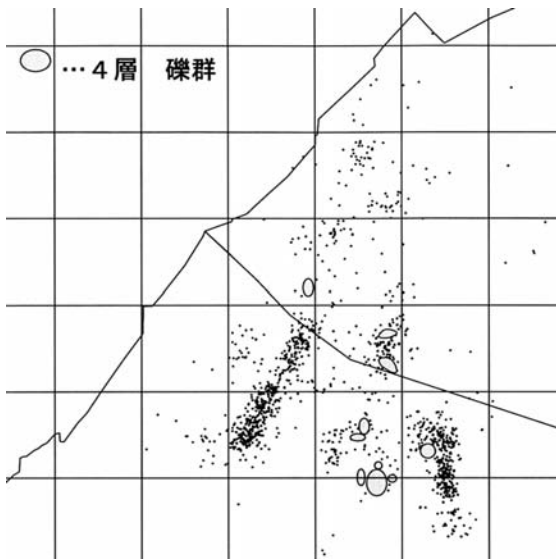


図1 4層石器分布 (メッシュ 10m 四方)

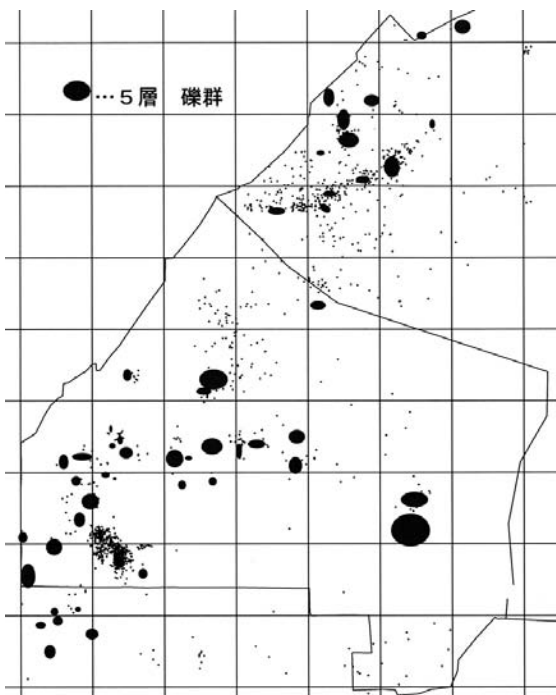


図2 5層石器分布 (メッシュ 10m 四方)

分析をすすめていきたい。

以下上層より概要を述べるが、調査途上であるため器種分類や点数には今後変更が出ること、また、剥片剥離技術等は調査時の主観に基づいた記述になることをご容赦願いたい。

3・4層からは2,000点近い石器が出土している。石器の多くはブロックを形成して出土している。長さが20m弱の列状のブロックが存在するが、複数の小さなブロックが重なっている可能性が考えられる。安山岩が主体で、黒曜石や玉髓、メノウ、流紋岩がわずかに使われている。主な器種はナイフ形石器やスクレイパー、石核、剥片である。ナイフ形石器は安山岩を主体にメノウと黒曜石が認められる。安山岩のナイフ形石器は横長剥片を素材とする。当層で出土する安山岩の石核や剥片は、打面と作業面を転移しつつ小さい横長剥片を剥離している。メノウのナイフ形石器は搬入品と考えられる。この層で特筆すべき器種はスクレイパーである。これらのほとんどは板状で平面形が三角形となるものが多い。石核を転用しているものが大半で、錯交剥離を施しているものが多数見られる。出土数は20点近い。検出された遺構は礫群10基で、全て分散型である。花崗岩を主に使用しており、被熱している。礫群は

石器ブロック内で検出されるものとそれ以外のものが存在する。その他に台石状のものが多数存在する。

5層からは1,500点を超える石器が出土している。直径5mほどの石器ブロック(石器ブロック1)からまとまって出土している。その他にも石器ブロックは存在するが、出土数の密度にはかたよりがあり、今後石器ブロックの認定を検討する予定である。石器使用石材は安山岩がほとんどで、黒曜石、流紋岩、玉髓もある。主な器種はナイフ形石器、角錐状石器、スクレイパー、石核等である。ナイフ形石器は石器ブロック1およびその周辺から出土しており、石器ブロック出土のものはそこで製作されたものと考えている。角錐状石器は礫群に近い位置で出土しており、黒曜石、安山岩がある。安山岩の石核や剥片を見ると打面と作業面を転移して小形の横

長剥片を剥離しているが、黒曜石と流紋岩、玉髄は比較的縦長剥片を剥離している傾向が認められる。検出された遺構は石器ブロック、礫群、土坑、炭化物集中地点である。石器ブロックは石器ブロック1と遺跡の北側に帯状に広がる石器ブロック群の大きく2群に分けられる。石器ブロック1はほとんどが安山岩で、礫群との重なりはないが、帯状の石器ブロック群は礫群と重なって検出しており、遺物密度も異なることから性格が異なる可能性を考えている。礫群は49基確認しており、構成礫は花崗岩と閃緑岩が主体で、大半は直径10cm程度の円礫である。赤色化したものやひびがあるものが多く、被熱している。礫群の規模は直径1m未満と1.5m以上の2種類に大きく分けられる。礫群総数は今後の整理を通じて増加する可能性がある。分布は石器と同様に南側と北側に分かれる。南側の一群は一部の例外を除き、等高線に沿って形成されており、礫群同士が重なることもない。また、礫群の底面が6層上面に接しており、構成礫の破損率はかなり低く、小礫が浮き上がる状況も見られなかった。したがって南側の礫群の形成時期はかなり近く、また使用状況の一括性は高いと考えている。北側の礫群は底面が6層上面で破損度が低く、礫の浮き上がりが見られない一群と、底面が6層上面から10cm程度上にあり、破損度が高く、小礫が浮き上がっている一群に分けられる。さらにこれらは分布が重なっているものもあり、明確に時期差が存在すると考えられる。礫群の検出状況と石器の出土状況がどう関係するのか今後確認したい。

土坑は1基のみで、平面形が長径約2m、短径1.6mの楕円形を呈し、深さが0.6mである。壁面は緩い曲線ですぼまり、底面は平坦になる。掘り込み面は4層と5層の軽石層の間に入り込む斜面からの流入土上面で、さらに遺構の上面を流入土が被い、4層の軽石がその上面に降り積もっている。土坑の層序は遺構を掘り込んだ土層が互層に堆積している。それぞれの厚さは1cm程度の薄いものから、10cm程度のブロック状のものがある。土坑に土砂が徐々に堆積したという状態ではない。また、土坑からは黒曜石10点と安山岩1点の石器が出土している。黒曜石のいくつかは二次加工の痕跡が見られ、調整剥片の可能性が高い。しかしいわゆるツールはない。ちなみに土坑周辺10m以内から石器は出土していない。

7層からは1,000点近い石器が出土している。使用石材は石英が多く、黒曜石と玉髄、流紋岩が



写真3 ナイフ形石器 (5層)



写真4 石器ブロック1・礫群 (5層)



写真5 土坑 (5層)



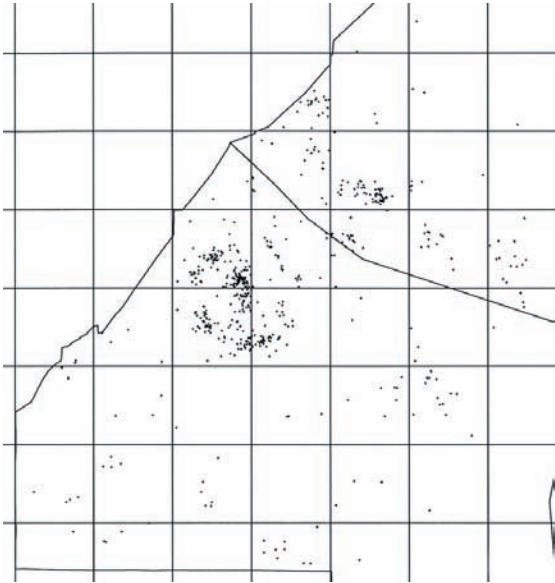


図3 7層石器分布（メッシュ 10m 四方）

見られる。主な器種は、台形様石器と石斧、砥石、スクレイパー、石核である。ナイフ形石器は今のところ見られない。台形様石器は全て黒曜石で6点以上ある。不定形剥片を素材としている。未分析であるが、隠岐産と考えられる。石斧は5点出土している。研磨痕はないが、完形品がないので、局部磨製石斧の存在は不明である。やや厚めのものと薄いものがあり、接合資料も存在する。石材は凝灰岩や変成岩を使用している。砥石は凝灰岩と花崗岩が1点出土している。検出された遺構は石器ブロックと炭化物の集中地点である。石器ブロックは遺跡の西側に直径2m程の小さな石器ブロックがわずかなまとまりを持って出土する地点がある。まとまりを見ると直径15mほどの環状に

見えなくもないが、かなり散漫である。これ以外にも石器ブロックが存在するが、平成19年に調査を行う部分もあり、今後検討したい。また、7層からは今のところ礫群は検出されていない。

以上、原田遺跡の概要について説明してきたが、近年の山陰・中国山地の注目される調査について簡単に触れておきたい。山陰では、鳥取県門前第2遺跡や島根県宍道湖周辺の調査がある。門前第2遺跡では、AT下位のローム層から、128点の石器が出土している。全て隠岐産の黒曜石で、縦長剥片素材のナイフ形石器9点や石核、剥片が出土し、接合資料も存在する。面積が10㎡のトレンチ調査であり、詳細については不明であるが、石器ブロックを形成していたものと考えられる。遺跡は現状保存されている。宍道湖南岸の丘陵地帯に立地する正源寺遺跡・宮ノ前遺跡・面白谷遺跡では、台形様石器3点やナイフ形石器3点、彫刻刀形石器1点、細石刃核と細石刃、スポール等が多数出土している。この中でも、細石刃核及び細石刃、ブランク、スポール、荒屋型彫刻刀形石器は湧別技法関連資料であり、玉髓の原産地である花仙山を背後に控えた遺跡群からこれらの資料が出土したことは注目すべきである。しかし、残念ながらこれらは全て原位置を保っていない。石材のほとんどは玉髓である。

中国山地東部に位置する岡山県真庭市東遺跡では、1983年に学術調査が行われ、2002～2003年にかけて開発に伴う発掘調査が実施された。尖頭器石器群のブロックが2カ所と細石刃石器群のブロックが1カ所検出されている。層位はソフトローム層が中心のようである。尖頭器石器群では尖頭器以外にスクレイパーや、細石刃が、細石刃石器群からは細石刃や細石刃核、細石刃核ブランク、彫刻刀形石器、スクレイパーが出土しているようである。尖頭器は左右非対称のもの比率がかなり高い様に思われる。細石刃核は角柱状又は角錐状である。両石器群の関係は不明である。

以上のように、原田遺跡の調査状況を中心に山陰と中国山地の最近の状況を見てきた。層位的な調査事例の増加は、停滞していた当地域の旧石器時代研究に大きな布石となろう。しかし、調査事例が増えたとはいえ、他地域に比べ見劣りすることは否めない。特に山陰は旧石器時代の遺跡については、普段の調査であまり注意されていない状況があり、これらの調査事例により、新たな視点で遺跡を捉え、当地域での旧石器時代研究が進展することを願う最後としたい。

中国古人類旧石器専門委員会  
第1回大会の開催について

中国の旧石器考古学会にあたる「中国古人類・旧石器専門（中国語では專業）委員会」の第1回大会が、2006年11月19～27日に福建省で開催された。同委員会は、中国民政部からすでに認可を受けており、学術組織上は上部学会（中国語では一級学会）である「中国第四紀科学研究会」の下部学会（中国語では二級学会）の1つとして位置づけられている。第四紀科学研究会との結びつきは、学問上の性格から見れば納得できることである。古人類と旧石器を併記したのは、人類進化と旧石器文化の両方に着目してきた周口店遺跡以来の学問的伝統に基づくものであり、中国科学院古脊椎動物古人類研究所（以下、IVPP）が1982年以来編集してきた『人類学学報』における二大研究分野である。しかし、今回「旧石器」を明記したところに、従来に比して旧石器考古学の分野をより重視した姿勢が窺える。

古人類・旧石器専門委員会第1回大会は、中国古生物学会（上部学会）・古脊椎動物学会（下部学会）第10回大会と合同で「古脊椎動物古人類学国際シンポジウム」として開催さ

れ、台湾（1名）、ロシア（3名）、日本（佐川のみ）を含む約200名の研究者が出席した（写真1）。中国側が期待したほど外国の研究者は出席しなかった。ロシアの研究者はクラスノヤルスク教育大学のドロズドフ氏らで、佐川も久しぶりに氏と再会した。20～22日に三明市の三明飯店で研究発表が行われ、23～26日に福建省西部の石灰岩地帯と世界自然遺産の武夷山で地質学関連のエクスカージョンが行われた。

古人類・旧石器専門委員会の研究発表会場が「古脊椎動物学会」と同一会場であったので、旧石器考古学の報告本数は佐川の発表も含めて10本に限定され、逆に恐竜化石の研究発表まで聞かされる羽目になった。今回は共催ということをやむを得なかったのであろうが、今後このような形式を採用するのであれば、第三紀末と第四紀の脊椎動物などの研究報告に限定するか、発表会場を分けるべきである。旧石器考古学の報告は、人類行動の理論や使用痕に関するもの以外は、従来報告の少なかった華中・南の遺跡の発掘調査に関するものが主体であった。石器群が比較的安定した堆積環境に残されている複数の事例が報告されたのは、印象的であった。形質人類学に関する報告も含めてそれらをここでいちいち説明する紙数のゆとりはないので、詳細を知りたい方は、「董為（IVPP 所長）主編



写真1 委員会第1回大会の開催風景



写真2 万寿岩遺跡博物館の外観

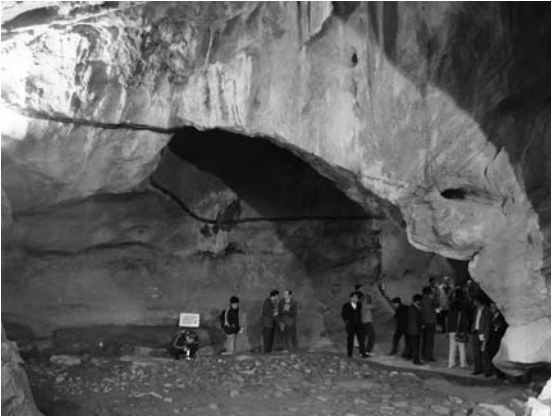


写真3 船帆洞地点の礫敷遺構を見学する研究者

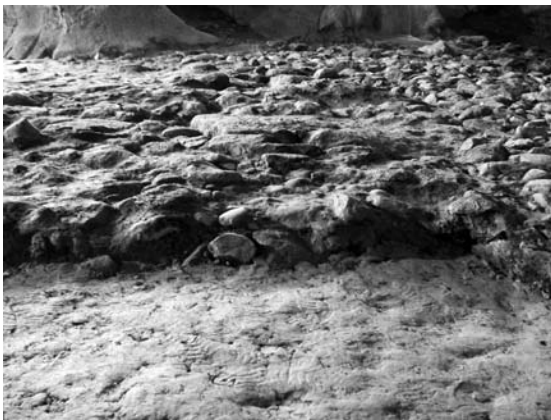


写真4 船帆洞地点の礫敷遺構の堆積状況



写真5 博物館に展示された礫敷遺構の模型

2006『第十届中国古脊椎動物学学术年会論文集』海洋出版社」をご覧いただきたい。

さて、三明市で開催された理由は、三明市が1985年以来、石灰岩洞窟の船帆洞と霊峰洞からなる旧石器時代の万寿岩遺跡を調査し、その発掘報告書の刊行、船帆洞地点の整

備完成、万寿岩遺跡博物館の開館式典（21日）にタイミングを合わせて、地元が学会開催を誘致し、共催という形式を採ったからである（写真2）。万寿岩遺跡の見学に際しては、とくに船帆洞地点で検出された礫敷遺構と称するものに関心が集まった（写真3）。その上面を覆う地層のAMS<sup>14</sup>C年代は、3万年前をやや遡る。礫敷遺構は、洞口寄りの粘土質の地層の上面にほぼ一層で密集し、その直上と礫の間から多くの石器が発見された（写真4）。礫が洞外から洪水などによって運搬された状況とは、明らかに異なる。取り上げた遺物の位置は、ラベルによって示され、複数の石器は、将来の検証のために取り上げずに現地に残してある。万寿岩遺跡博物館内には礫敷遺構の模型が展示されている（写真5）。

古人類・旧石器専門委員会では、第1回大会中に準備委員会段階の三役と理事の役員改選も行われた。主要な役員のみ紹介する。主任、すなわち代表は高星氏（留任、IVPP 副所長・研究員、旧石器考古学：写真1の左から2人目）、副主任は王幼平氏（北京大学文博学院考古系教授、旧石器考古学）と劉武氏（留任、IVPP 人類研究室主任・研究員、形質人類学）で、劉武氏は秘書長も兼務することになった。ところで、古人類・旧石器専門委員会には、上記の三役と理事はいても、会員はまだおらず、したがって会費徴収もない。今回の学会開催に当たっては、1回限りの会議費や宿泊費、エクスカージョン費が徴収され、論文集や報告書が配布された。今後、会員制や規約の整備も行われていくであろう。なお、同委員会第2回大会は、2008年5月頃に山西省太原市にある山西省博物院（院長は旧石器考古学専門の石金鳴氏）で開催される予定である。この時には、旧石器考古学や形質人類学を中心に第四紀学に関わる研究者だけが集まることであろう。また、中国有数の旧石器遺跡を有する山西省だけに、エクスカージョンも期待できそうである。（佐川正敏）



## 国内の関連学会

日本考古学協会第73回総会

開催日：2007年5月26日（土）・27日（日）

会場：明治大学駿河台キャンパス

主催：有限責任中間法人日本考古学協会・日本考古学協会第73回総会実行委員会

日程（旧石器時代関係のみ）

5月26日（土）

公開講演会

日本旧石器時代研究の現状と課題

安森政雄

5月27日（日）テーマ・セッション会場

テーマ：日本旧石器時代文化のはじまりと特質

第1部：日本旧石器時代の起源

問題提起1

前・中期旧石器捏造問題の反省をどう生かすか

石川日出志

問題提起2

東アジアの前・中期旧石器時代研究の現状

佐川正敏

問題提起3

日本旧石器時代の起源に関する研究の問題点

山田しょう

問題提起4

後期旧石器時代最初期の石器群の評価

諏訪順

討論

第2部：東アジアの旧石器時代と日本列島

問題提起1

局部磨製石斧の消長とその特性

小菅将夫

問題提起2

環状ユニット（ブロック群）の特質とその意義

橋本勝雄

問題提起3

剥片尖頭器の出現と展開

吉留秀敏

問題提起4

湧別技法の波及と展開

寺崎康史

討論

総括

## お知らせ

第4回日本旧石器学会総会、記念講演、一般研究発表、シンポジウム、ポスターセッションは、下記の日程で、2007年6月23日（土）・24日（日）に東京都文京区東京大学本郷キャンパスにおいて開催いたします。

総会、記念講演、一般研究発表、シンポジウム

場所 法文2号館1大教室

日程

6月23日（土）12時～18時

総会（12時～13時）

記念講演（13時～14時30分）

中国東北部における最近の旧石器（遺跡）の発見と研究（仮題）

陳全家（中国・吉林大学）

一般研究発表（14時30分～18時）

1. 栃木県矢板市 高原山黒曜石原産地遺跡群の2006年度の調査成果

田村 隆・国武貞克・上

野修一・芹澤清八・森嶋

秀一・小野昭（高原山黒

曜石原産地遺跡群発掘調

査事業調査指導委員会・

調査委員会）

2. 九州の後期旧石器時代石器群の編年

阿部敬

3. シリア、デデリエ洞窟のムステリアン石器群

西秋良宏・仲田大人・近

藤修・米田穰・S. ムヘイ

セン・赤澤威

- 4.九州における細石刃期の遊動領域  
芝康次郎
5. 神子柴遺跡における尖頭器の使用痕分析  
堤 隆
6. 更新世終末～完新世初頭における中部高地  
黒耀石原産地の開発に関する仮説  
及川 穰 ・ 池谷信之 ・ 安蒜政雄

6月24日(日) 9時～15時

シンポジウム 旧石器時代の生活を考える

1. 古人骨の同位体分析による旧石器時代の食生態  
米田 穰
2. 動物遺体と旧石器時代の食生態  
木村英明
3. 岩宿時代の植物質食料  
鈴木忠司
4. 使用痕分析からみた旧石器時代の生業  
山田しょう
5. 旧石器時代の住居状遺構をめぐる諸問題―  
神奈川県田名向原遺跡 No.4 地点とその周辺―  
島田和高
6. 旧石器時代の移動生活について  
国武貞克

ポスターセッション

場 所 法文1号館114教室

日 程

6月23日(土)・24日(日)

※コアタイムは24日の昼休みの時間です

1. ロッキー山脈東縁部におけるパレオインディアン期の岩陰遺跡調査～ワイオミング州 Two Moon 岩陰の発掘調査～  
橋詰 潤
2. 実験を用いた骨に残る狩猟痕跡の分析  
石井良
3. 群馬県の細石器遺跡  
小菅将夫

申し込みは別添のハガキにご記入の上、5

月21日(月)までに、事務局までお申し込み下さい。また、やむを得ず欠席する場合は、会則第5条により、欠席会員の委任状を含め、全会員の5分の1以上の出席をもって総会が成立しますので、同ハガキ下段に記載された委任状に記入、捺印のうえ投函願います。

### 新入会員について

ニュースレター第6号発行後に以下の方々が本会に入会されました。

坂下貴則、杉原重夫、藤波啓容、吉川照章、岩瀬 彬

### 会費納入のお願い

2007年度会費の納入をお願い致します。また、2006年度以前の会費を納めていない方は、速やかに納入して下さい。会費納入は同封の郵便振替用紙にてお願い致します。年会費5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。

### 住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願い致します。事務局までメール等でご連絡ください。

日本旧石器学会ニュースレター  
第7号

2007年3月31日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会  
安蒜政雄・谷和隆・藤田尚・藤野次史

発行：日本旧石器学会

事務局：愛知学院大学文学部白石研究室

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話 05617-3-1111～8(内線3247)

E-mail hshira@dpc.aichi-gakuin.ac.jp